琉球大学学術リポジトリ

グローバル社会における詩教材の可能性
～山之口貘の詩から見えるもの～

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2012-12-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大城, 貞俊, OSHIRO, SADATOSHI
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25578

グローバル社会における詩教材の可能性
～　山之口貘の詩から見えるもの　～

大城貞俊

Possibilities of poetry as a teaching material in Global Society

—Focusing on the Poems of Yamanoguch Baku—

SADATOSHI　OSHIRO

【要旨】

沖縄県が生んだ近代・現代を代表する詩人に山之口貘がいる。山之口貘は、戦前期の日本社会に残っていた負の遺産としての沖縄差別や貧困を、平易な日常語で詩の言葉として紡ぎ、ユーモアとペーソス溢れる詩世界を構築した。山之口貘の詩は、文科省検定の小学校、中学校、及び高等学校の国語科教科書で採用され紹介されている。また、沖縄県で作成された国語科副読本の中でも、代表的な詩教材として定着している。本論では、「差別」「偏見」「推敲」「言葉」「地域」「詩教材」「書くこと」などをキーワードに、山之口貘の詩を通して、地域教材がひらく可能性を考えてみた。山之口貘の詩には、言葉との格闘があり、同時に伝統的な言語文化の視点がある。また、「書くこと」の意義が具体的に伝わってくる。山之口貘の詩を学び、国語科教材としての授業展開を検討することは、グローバル社会における詩教材の可能性を考えることに大いに役立つものと思われる。

1、はじめに

沖縄県が生んだ近代・現代を代表する詩人の一人に山之口貘がいる。山之口貘は、戦前期の日本社会に残っていた負の遺産としての沖縄差別や貧困を、平易な日常語で詩の言葉として紡ぎ、ユーモアとペーソス溢れる詩世界を構築した詩人である。

山之口貘は、大正期に辺境の地としての沖縄県から上京し、貧しい生活を続けながら、共通語としての日本語で詩作をし、１編の詩を完成するのに100回もの推敲を重ねたとも言われている。

今日、山之口貘の詩は、文科省検定の小学校、中学校、及び高等学校の国語科教科書で採用され紹介されている。また、沖縄県で作成された中高校国語科の副読本の中でも、代表的な詩教材として定着している。

【表１－１】山之口貘詩の教科書採用状況

題　名	対　象	出版社	採用年西暦
船	小６年	光村図書	05年
天	小６年	日本書籍	68年 71年 74年 05年
	小６年	大阪図書	02年
	小６年	東京書籍	86年 89年
ミミコの独立	中１年	教育出版	93年 97年
	中１年	三省堂	78年 81年 84年 87年 90年
	中２年	学校図書	78年 81年
妹へ送る手紙	高校　現代国語Ⅰ	三省堂	73年 76年 79年
喪のある景色	高校　現代国語３	第一学習社	78年 81年
賑やかな生活である	高校現代文	角川	

2、山之口貘の人と作品

山之口貘は、1903年、那覇市に生まれ、1963

題　名	対　象	出版社	採用年西暦
ねずみ	高校 現代文	三省堂	04年
弾を浴びた島	高校 現代文	筑摩書房	83年 86年 89年 95年
鮪に鰯	高校 現代文	桐原書店	04年
私の青年時代 （エッセイ）	高校 国語１	三省堂	79年 83年 86年

【表１－２】副読本での採用状況（沖縄県）

題　名	対　象	出版社	採用年西暦
弾を浴びた島	中学校	沖縄時事 出版	87年
会話	高校	沖縄時事 出版	91年
妹へ送る手紙	高校	文進印刷	97年

年、東京で没した。本名は山口重三郎。1917 年沖縄県立第一中学校に入学、詩作や絵画に熱中するが、1922 年に県立第一中学校を中退して上京、翌年関東大震災に遭い帰郷する。

1924 年再び上京、様々な底辺の職場を転々としながらも詩を書き続け、佐藤春夫、金子光晴、草野心平などの知遇を得る。1937 年に金子光晴の立ち会いで結婚、翌 1938 年に処女詩集『思辨の苑』を刊行して詩人としてデビューする。1958 年、一時沖縄に帰郷し、文学仲間の熱烈な歓迎を受ける。1963 年、胃ガンで東京都新宿区の病院に入院、４か月の闘病生活の後、亡くなった。

山之口貘は、関東大震災後の新しい文学運動が展開され始めたまっただ中に飛び込み、政治的には右でも左でもないという立場で詩を書き続け、終生、沖縄を忘れることの出来なかった詩人である。平易な語彙による語りに近い独特なリズムを生み出し、ユーモアとペーソス溢れる作品世界を築き上げたと言われている。(参照：『沖縄大百科事典』1983 年、沖縄タイムス社)。

山之口貘には、処女詩集『思辨の苑』の他に、1940 年に『山之口貘詩集』を出版、1958 年には『定本　山之口貘詩集』を出版する。本詩集で第２回高村光太郎賞を受賞した。逝去して１年後の 1964 年に遺稿詩集『鮪に鰯』が編集され出版されたが、寡作な作家の一人であったと言えるだろう。

具体的な作品については、教科書、及び副読本に採用された作品を、末尾に資料として掲載する。山之口貘の詩の特徴は、これらの作品からも考察することが出来るはずである。

なお、山之口貘の略年譜は「表２」のとおりである(注1)。

【表２】山之口貘略年譜

明治36年　1903年 ９月11日、沖縄県那覇区東町に生まれる。 本名山口重三郎。父重珍、母カマドの三男。
大正06年　1917年　14歳 沖縄県立第１中学校に入学。３年に進級した頃、失恋などで悩み、絵筆のかたわら詩作に励む。
大正09年　1920年　17歳 経済恐慌起こる。沖縄産業銀行八重山支店長の父の鰹節製造業つぶれる。当時地元新聞社に詩を発表していたが、琉球新報に掲載された抗議詩「石炭」が在学中の県立１中の職員室で問題になる。父の経済上の失策のため家族の離散、失恋等が原因で、中学４年で中退する。
大正11年　1922年　19歳 上京。初めて本土の土を踏む。日本美術学校に籍を置く。
大正12年　1923年　20歳 東京の生活は厳しく、学費や生活に窮しているところ、９月１日の関東大震災に遭う。罹災者恩典で帰郷。山城正忠主唱の琉球歌人連盟に上里春生らと幹事になる。
大正13年　1924年　21歳 詩稿を抱いて２度目の上京。しかし、大震災後の東京に職はなく、帰郷。沖縄本島の親戚や友人間、また一時、父母のいる八重山を転々とする。
昭和02年　1927年　24歳 ３度目の上京。詩人サトウハチロー等を知る。 しかし、定職を得られず放浪生活へ入る。書籍問屋の荷造人、暖房屋、お灸屋、隅田川のダルマ船の鉄屑運搬助手、ニキビソバカス業の通信販売員や汲取屋など、さまざまな職業に就きながら、貧乏生活の中で詩を書き続ける。その頃より、山之口貘の名を用いる。佐藤春夫にその才能と人柄を

愛されて、しばしば生活上の支援を受ける。
昭和08年　1933年　30歳 金子光晴と知り合い、親交を結ぶ。
昭和12年　1937年　34歳 金子光晴夫妻の仲人で、茨城県結城郡の小学校長の娘安田静江と結婚。新宿のアパートで新生活を始める。
昭和13年　1938年　35歳 第１詩集『思辨の苑』を刊行。佐藤春夫、金子光晴の序文を付す。
昭和14年　1939年　36歳 東京府職業紹介所に就職。
昭和15年　1940年　37歳 12月『山之口貘詩集』を刊行。
昭和16年　1941年　38歳 ６月、長男重也出生。
昭和17年　1942年　39歳 ７月、長男重也死亡。
昭和19年　1944年　41歳 ３月、長女泉出生。12月太平洋戦争勃発。妻の実家茨城県飯沼村に疎開。
昭和23年　1948年　45歳 ３月、一家で上京。練馬区に移り住む。以後の住居となる。10年近く勤めた職業安定所を退所し、もっぱら文筆生活に入る。
昭和33年　1958年　55歳 『定本山之口貘詩集』を原書房より刊行。11月、34年ぶりに故郷へ帰る。滞在中、母校を振り出しに、各高校に乞われて講演行脚する。
昭和34年　1959年　56歳 『定本山之口貘詩集』に第２回高村光太郎賞。
昭和38年　1963年　60歳 ３月14日、胃癌のため東京都新宿区大同病院へ入院、４か月の闘病生活の末、同病院にて７月19日永眠。直前、沖縄タイムス文化賞を受ける。
昭和39年　1964年 12月、遺稿詩集『鮪に鰯』を原書房より刊行する。 ※　山之口貘の墓は、千葉県松戸市の八柱霊園にあって「山之口貘の墓」と刻まれている。

３．山之口貘の詩の特質と魅力

山之口貘は、なぜ平凡な日常を珠玉のように慈しんで詩の言葉とすることが出来たのだろう。なぜ一編の詩を完成するのに百枚もの原稿用紙を費やしたのだろう。また、なぜ語りに近い日常語で、ユーモアとペーソス溢れる作品世界を作り出すことが出来たのだろう。貘の詩の魅力は、その疑問を解き明かすことで示すことが出来るように思われる。

自伝によれば、貘が二度目の上京を果たしたのは大正13年の夏である。貘の生きた時代は、沖縄の人々にとって、差別と偏見の対象とされた辛苦な時代であった。貘にとっても、時代を生き抜く方法を確立することは大きな課題であったはずだ。

昭和13年に刊行された第１詩集『思辨の苑』には、すでに貘の詩人としての特質が遺憾なく発揮されている。収載された詩の一つに「存在」と題する次のような詩がある。

> 僕らが僕々言っている／その僕とは僕なのか／僕が、その僕なのか／僕が僕だって、僕が僕なら、僕だって僕なのか／僕である僕とは／僕であるより外に仕方のない僕なのか（「存在」。斜線は筆者注で改行を示す）。

貘は、自らの存在を認識するために複眼的な視点を構築していることが、この詩から理解できる。国家や世間が絶対的な価値観を強いる時代に、多様な視線を持つことが重要であることを、貘は様々な職業を遍歴しながら会得していたものと思われる。

実は、ここに貘の詩の魅力の一つが隠されている。つまり、差別や偏見と対峙し、沖縄人としてのアィデンティティを確立するためには多角的に物事を見ることが必要だったのだ。自他の言説を絶対視せずに苦しみを昇華する。国家の言説も、世間の言説も、多角的に捉えることによって価値を相対化していく。このような姿勢は、当然、詩作の方法にも繋がっていく。100回書き直す行為は、なにも詩の巧拙のみに関わる問題ではない。言葉と格闘しながら精神を浄化する消炎剤としての効能もあったはずだ。

貘はまた、上京後の困難な時代を生きる姿勢について、「自殺したつもりで生きることに決

めた」（「自伝」）と記している。(注2)。これが貘の詩の魅力を解明する二つ目の鍵だ。一度、死を決意した者にとっては、見るもの全てが新鮮に映ったはずだ。死とは観念的な世界で成就されるものではない。まさに生活との格闘であり日常の次元からの失踪である。そうであれば、詩のことばも当然、観念的なことばは排除される。平凡な日常は非凡な日常に反転し、人生は価値あるものとして浮上するのだ。

多角的な視点を持った目と、自殺の決意を通過してきた目を、たとえば「うりずんの目」と呼ぶことが出来る。うりずんとは、大地を潤す慈雨の季節のことだ。貘は困難な時代を経て、百人の目を持ち、一日を百日にすることの出来る優しい目を獲得した。この目は、日常の些事の風景や感慨に宿る命を見つめ、日々を珠玉のように慈しむ。まさに人生を潤す目だ。その意味においては神の目であり、自然の目である。

貘の代表的な詩とされる「会話」は、偏見と差別に晒されたウチナーンチュの複雑な心情を吐露した詩と評されている。しかし、ここには、「お国は」と問われ、多角的な思考で答えをずらし、ずらしながら複眼的な視点の一つであるユーモアを構築し、ユーモアを構築しながら赤道直下のあの近所で生きる快哉を叫ぶ晴れやかな貘の表情が見えるようにも思われる。

> まるで僕までが、なにかでなくてはならないものであるかのやうに、なんですかと僕に言ったって　既に生まれてしまふた僕なんだから／僕なんです（「数学」）

貘の詩は、ぼくらに、とてつもなく大きな力を与えてくれる。詩とは、なんともはや、かくも多様で痛快で愉快なものなのだ。（注：本項は筆者小論「うりずんの目」2003年沖縄タイムス新聞紙上に発表したものに、若干の加筆修正をした）。

4．国語教育の中で詩教育の果たす役割

詩の教育が、国語教育の中で果たす役割については、これまでも多くの人々が、多くのことを述べてきた。文学作品であること、あるいは短歌・俳句等と同じ韻文であること、あるいは創作指導の側面からも、詩の役割は重要な位置を占めると力説されてきた。その一人に、実作者でもあり、国語科教科書の編集など、国語教育とも繋がりの深い小海永二の発言は共感を得るところが大きい。

小海は、『現代詩の指導－理論と実践』（1986年初版明治図書）の中で、「国語教育の中で詩の教育の果たすべき役割は独自のものがあり、それは非常に重要だと思う」として、次の４点にまとめて述べている。

> 第一に、言葉の教育＝言語教育（日本語の教育）ということを言う場合に（国語教育である以上、それを言うのは当然である）、詩の表現というものが、散文の表現よりもずっと豊かに端的に言葉のありよう・言葉の働きを示しており、言葉のありよう・言葉の働きを知り、言葉そのものについての認識を深めるのに、非常に有効だと信じるからである。
>
> 第二に、これが最も重要な点なのだが、詩が読み手・書き手の双方にとってその感性に深くかかわる芸術的表現であって、詩を学ぶことで子どもたちの感性の豊かな耕しが行われると考えるからである。（中略）。
>
> 第三に、詩の教育は、鑑賞指導では子どもたちの主体的な読みや味わいを最大限に認めてやることによって、創作指導ではその表現の独自性を尊重してやることによって、子どもたちひとりひとりの個性を伸ばすのに役立つからである。（中略）。
>
> 第四に、このことは第三のこととも関連があるのだが、詩の教育には創造性の開発という側面が含まれていると思われるからである。詩には、そもそも通念や常識を破って、新しい角度から物をとらえたり、新鮮な感じ方を提示したりする働きがある。またそのような詩こそ、価値ある詩なのである。そこで、詩を読んだり書いたりすることは、通念や常識にとらわれぬ独自の物の見方や感じ方を学ぶことになり、そのことは子どもたちの創造性の開発というねらいにかなっ

てくる。

まことに、示唆的な提言で、実作者として、言葉に向き合った小海の体験の重さが感じられ、説得力のある主張になっている。

また、現代詩を積極的に教材化している足立悦男は、現代詩は、「どこかで、生徒たちの認識や感情を刺激し、生徒たちの内面に隠れている言葉を引き出す力を持っている」と述べ、「すぐれた現代詩は、教室に持ち込むだけで、もうそれだけで言葉の波紋をたててくれる」と述べている(注3)。そして、詩の教育に「異化の詩教育学」という概念を持ち込み、ロシアフォルマリストのシフロスキーの「異化論」を援用しながら、「異化の詩教育学ー異化・変容・生成の詩教育」という理論を作り上げた。足立は、「異化」については、シフロスキーの言葉を借りて次のように説明する。(注4)。

> 事物と密着してそれ自身意識されなくなる日常言語に対して、言葉を事物との習慣的密着から解放し、事物の本質を明視するための詩的言語の働き、文学作品の手法として求められた。

なお、足立悦男には、詩教育に関する著書が多数あるが、その一つに『国語教育実践理論全書１新しい詩教育の理論』（1983年、明治図書）がある。本書では、従来の「鑑賞指導」に重点を置いたいわゆる「感じ方の詩教育」に疑問を呈し、新たに「認識」の観点を強調し、「見方の詩教育」理論を展開している。「見方の詩教育」は、「子どもたちの現実認識の力を鍛えることをねらいとする」として、山之口貘の詩「天」を具体例に挙げながら、次のように述べている。

> 貘の詩「天」は、この詩人の、現実に対する埋めがたい違和の内面が透けて見える。（中略）天に〈落っこちそうになる〉恐れと、〈土の中へもぐりこみたくなる〉ほどの不安にさいなまれた恐れの認識である。この詩人はいま、下界にも天界にも身の置き場を失う恐れと不安におののいている。この詩を教材化するのであれば、ものの見方と内面のこの関係をこそ問うべきである。
>
> 貘と同じように、草原に寝ころんでこの詩を読んでみればわかる。（中略）快い状態で空を見上げているときには、天と地の逆転といった奇抜な発想の表面しか読めない。「天」の詩が迫りくるとき、わたしたちは貘という詩人の見方の背後に、生活の憂いというものの底知れぬ奥深さを見出してたじろがされる。生活詩を書く詩人が貴重なのは、我が身を削りながら生活の光と影をぎりぎりまで追いつめていく、その生活認識の凄さをわたしたちに教えてくれるからである。要点は、やはり物事への見方の問題と、見方の背後にある詩人の内面との関係なのである。

足立悦男は、本書の中で、さらに「イメージの多義性」や、「比喩表現の力」についても言及している。いずれにしろ、国語教育の中で詩教育の果たす役割は大きく、まさに「ことばの力」を考えさせるに大きな役割を担っていると言っていいだろう。

５．今、なぜ山之口貘か

ところで、今、なぜ山之口貘なのか。時代は情報化社会と呼ばれ、グローバル社会と呼ばれてから久しい。平成20年度告示の学習指導要領では、国語科において「伝統的な言語文化」についての学習が新設され重要視されている。

しかし、このような時代であればこそ、山之口貘の詩の価値も再浮上してくるように思われる。換言すれば、貘の詩の特質が、そのまま今日の時代の課題に答えてくれるように思われるのだ。

貘の詩については、いくつかの特徴を挙げることが出来る。ここでは、五つの特徴に整理してみたが、この特徴が、教材化の視点とも重なるように思われる。

まず、一つ目には、「地域とグローバルな視点を学ぶ」手がかりがあるということだ。貘の詩は、地球的な規模で、世界や人類の未来をうたった詩が多い。また、辺境の地沖縄から東京に出て、郷里への郷愁をうたった詩も多く見られる。貘

の詩に頻繁に見られる「地球」という語に着目した詩人の高良留美子は、貘のことを「地球の住人」と称しているほどだ。(注5)。

貘の詩を読むと、地域の課題が世界に広がり、世界が地域に息づいているように思われる。このことの大切さを学ぶことは極めて今日的な課題である。具体的な作品を末尾に付した詩作品から選べば、「船」や「鮪に鰯」、「喪のある景色」などがあげられよう。

二つ目は、「ことばに対する姿勢を学ぶ」ことが出来るということだ。ことばの機能や働きを注視する姿勢を身に付けると言い換えてもいい。

国語科においては、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」は、大切な学習の３領域である。地方の方言言語を生活言語としていた貘にとっては、100回も書き直す推敲の作業は、まさに「ことばを学ぶ」ことの苦闘であっただろう。ウチナーグチを捨て、同時にウチナーグチをも取り込んだ詩表現を確立する営為は、ことばに向かう大切な姿勢を学ばせてくれる。本稿の末尾に示した作品からは、「弾を浴びた島」などを例として挙げることが出来る。

また、貘の詩の表現技法に着目することも、「ことばの力」を学ぶ上では、極めて有効な方法に思われる。貘の詩のみならず、ことばの力を学ぶ上では、詩が有効な教材になりえることは、自明なことであるが、特に貘の詩には、その力を考える手がかりが顕著であると言っていいだろう。

貘の詩の表現の特徴について述べた論考は、仲程昌徳の「『ない』ことをめぐる『思辨』」が示唆的である。(注6)。

仲程昌徳は、具体例を挙げながら、説得力のある論を展開しているが、貘の詩表現の特徴の一つには、「偽物化」と「擬人化」の手法の「妙」にあるという。「貘の詩の異風さ」は、ここにその一つの原因があると言うのだ。

例えば、詩「ものもらいの話」の次の２行、「恩人ばかりを振ら提げて／交通妨害になりました」と、詩「檻襤は寝てゐる」の次の４行、「まひるの空から舞い降りて／檻襤は寝てゐる／夜の底／見れば見るほどひろがるやう　ひらたくなった地球を抱いている」を挙げ、前者「ものもらいの話」の２行を（A）、後者「檻襤は寝てゐる」の４行を（B）として次のように述べる。

> 例えば（A）の、「恩人ばかりを振ら提げて」といった１行。「振ら提げ」られるのは物であって、概念ではないはずである。「恩人」と「振ら提げて」とは通常では結びつかない。１行目と２行目の関係も同様である。語と語のレベルでも、文と文のレベルにおいても、通常ではみられない表現。結びつくことのない語と語、文と文とが、強引に結びつけられている。オクシモロン（対義結合、撞着語法）とも異なり、異領域語結合とでも呼んだ方がいいような表現である。
>
> （B）の「檻襤は寝てゐる」も(A)と類似の１行である。通常「寝る」は生命体の述部で、「檻襤」は「朽ちる」であろう。（B）の手法も、本来つながるはずのない語を連結したものであるが、（B）には、「夜の底」(a)、さらに「地球を抱いている」(b)といった表現も見られた。これらも通常ではない用法である。（中略）。
>
> （A）と（B）とは、似たレトリックになっている。しかし、その内実は、偽物化と擬人化というように全く逆向きになっている。その偽物化や擬人化が、通常の表現とは異なる印象を強いものにしたと言える。
>
> 偽物化や擬人化の手法は、しかし、貘だけが得意とする手法ではない。そしてそれは新しいレトリックでもなかった。貘の詩が異風な印象を与えるのは、「恩人」と「交通妨害」、「檻襤」と「地球」という範疇を異にする語の応答によるし、何よりもその対応の妙にあった。

仲程昌徳の指摘は、（A）と（B）の詩行のみならず、貘の詩に多く見られる特徴であることは間違いない。

仲程は、その他、貘の詩表現の特徴を二つ指摘している。これも、仲程自身の言葉を引用して紹介した方がいいだろう。その一つは、貘の詩が「平易な詩」であると言われるゆえんは、なぜか、と問う視点からの解明と特徴である。(注7)。

まず、１つには語のレベル。
(A)で言えば、「恩人」「交通妨害」、(B)で言えば「檻樓」「地球」といった語である。それらを難解語と見るのはいない。日常語である。そしてそれは、貘の全ての詩語について言うことが出来る。
二つには、述部。
それを単純化して列挙していくと、
ア）言ひました、言った、言ふんだが、言ふのだ、言ふと、おっしゃるか
イ）あった、ある、あります、のである
ウ）ゐる
エ）です
といったように、大略、四つのグループにまとめることが出来る。それをさらに大別すると、「言う」形と「ある」形に分けられるほど、くっきりとした形を持っている。「言う」形は会話体を、「ある」形は口語文の指標となるもので、特別に改まった感じをいだかせない。
三つには、歌われた対象。
　私は、雨に濡れた午後の空間に顔を突っ込んでゐるのである／身を泥濘に突きさして私はそこで立ち止まってゐるのである／全然なんにも要らない思想ではないのである／女とメシツブのためには大きな口のある体格なのである。（「解体」）
『思辨の苑』は、そのほとんどが、「解体」に歌われている「女とメシツブ」を対象にしている。生と性という人間の行為と関わり、極めて身体論的である。
貘の詩が「平易」であるとされるのは、多分、そのような生と性が、対話的で、陳述的かたちをとり、身近な言語でもって歌われていることにある。

このように、仲程昌徳は貘の詩の平易さは、一つ目に使われる語が日常語であること、二つ目に述部が「言いました」「ある」などくっきりした形をもっていること、三つ目に歌われる対象が日常の生活と密着していて極めて身体論的であることを挙げている。このことは、学び手の子供たちにとっても容易に馴染める世界であるはずだ。

仲程は、さらに貘の詩表現の特徴として「反転の詩法」があると述べる。「反転の詩法」は、「貘の詩法の最も優れた特徴として挙げられる」として、「現金」「座蒲団」の二つの詩を例示して説明する。ここでは「現金」の詩を例示し、仲程の指摘を紹介したい。まず、「現金」は、次のような詩である。

誰かが／女というものは馬鹿であると言い振らしてゐたのである／そんな馬鹿なことはないのである／ぼくは大反対である／諸手を挙げて反対である／居候なんかしてゐてもそればかりは大反対である／だから／女よ／こっそりこっちへ廻はっておいで／ぼくの女房になってはくれまいか
（「現金」）

仲程の述べる「反転の詩法」とは、この詩のように、「馬鹿である →ないのである →大反対 →反対 →大反対 →だから」という論の展開の方法をさす。喩えて言えば「肯定（定理）→否定 →否定 →否定 →否定 →だから」と記号的には説明することが出来るだろう。このどんでん返しとも言うべき論の跳躍、あるいは落差が、貘の詩の特徴というのである。

仲程は、この「反転の詩法」は、この詩のように「だから」という直接的な用法で現れるだけでなく、「座蒲団」のように、「楽の上に座ったさびしさよ」と、異領域結合の型で現れることもあるという。さらに、この「反転の詩法」が生まれた背景や拠点について、次のように述べる。

（この詩法は）「ない」ことの認識を巡って生まれてきたと言っていいだろう。「ない」状態を際立たせるための最大の戦略としてそれはあったし、「ない」ことをめぐる「思辨」が生み出した方法であった。

「ない」状態とは、経済的にも精神的にも追いつめられ、まさに逼迫した貘の日常をもさし

ているように思われる。そして「妹へ送る手紙」も、「その変形といえる一篇」として、次のように述べる。

> 「書かうとはするのです」「書けないのです」「書かないのです」「書けないのです」「書けなくなって」「書いたのです」というように書こうとするが書けない、書けなくなって書いた言葉。その振り絞ったところで生まれたのが、貘の詩であった。

仲程昌徳のこのような提言は、まさに、言葉がどのような力を有しているかを考えることに繋がる。言い換えれば、貘の詩は、考えることが生み出した「ことばの力」とも言えるだろう。

さて、三つ目の視点は、「社会の中で生きることの意味を学ぶ」ことが出来るということだ。具体的には、差別や偏見に対峙する詩を読むことによって、人間と人間の関係の有り様を学ぶことが出来ると言える。あるいはだれでもが有する「基本的な人権」の問題に繋がる視点を、貘の詩は有していると言っていいだろう。末尾に付した詩「会話」などは、このことの最も顕著な例にあげられよう。

四つ目は、「戦争の愚かさと平和の尊さを学ぶ」ことが出来るということである。「命を見つめる力」と言い換えてもいいが、グローバル社会であればこそ、人類共生の思想を確立することは、最も重要なことであるはずだ。去る大戦で地上戦を体験した郷里沖縄へのの思いは、必然的に平和への思いに繋がっていく。末尾に掲載した詩からは、戦争が終わった後の沖縄訪問を題材にした「弾を浴びた島」や、ビキニ環礁での水爆実験を題材にした「鮪に鰯」、さらに「ねずみ」などを、作品例として挙げることができるだろう。

五つ目は「感性の力の大切さを学ぶ」ことが出来るということだ。あるいは「感性の力の必要性」と言い直してもいい。山之口貘には、時代に流されない豊かな想像力がある。東京生活の中で、自明なものを疑い、発想を転換して物事を認識する方法を身に付けていたものと思われる。例えば「天」という詩。ここには何ものにも負けない感性の力強さがある。発想を転換して物事を認識する方法がある。「天」と「地」を逆転して見る発想は、人間の豊かな想像力の世界が生み出した賜だと思われるのだ。

山之口貘の詩は、このように教材化するに多様な視点がある。そして、それらの課題に答えることが出来る世界を有している。換言すれば、貘の詩の世界は頑固である。そして、日常の中にこそテーマがある。このことが貘の詩の魅力の一つでもある。そして、まさにこのことによって、貘の詩は、十分に今日的であると思われるのだ。

今日、国語科の学習においては、自らの生活に根ざし、自らの生活に還元する学びが重要視されている。日常の生活の中からテーマを探し出して詩の言葉にする貘の詩世界は、日常を凝視することの大切さをも教えてくれる。さらに故郷に目を凝らす視点は、地域の言語文化の発見と創造にも繋がるはずである。

グローバル社会の中で世界の国々が共存し、平和を築くためには、それぞれの国の文化や、社会の仕組み、あるいは日常の生活に根ざした慣習や家族のあり方までも理解し尊重する姿勢を培うことが大切である。そのためには、同時に私たち自身にも、同じ視線を向けなければならないはずだ。

このことについて、府川源一郎（横浜国立大学教授）は、著書『私たちのことばをつくり出す国語教育』（2009年、東洋館出版社）の中で、次のように述べている。

> 各地域の教師たちは、それぞれの地域の中で教育活動を行っている。したがって、そこでの営みはそのまま「地域の子どもを育てる」ということにつながっている。（中略）しかし、その教育が、子どもたちに、郷土に生まれたこと、あるいは郷土で育っていくことの喜びと自負とを育てているか。また、地域に根ざした思考と、地域の文化をふまえたものの見方を、身に付けることができているか。それが問題である。もし、学校教育が、その地域に生まれたことの誇りとそこへの愛着を生みだしていないとするのなら、ほかならぬ「地域」で教育活動

をすることの意義はどこにあるのだろうか。
もっとも、地域に深く腰を据えた教育とは、偏狭な愛郷心を育てるものではないことも、言い添えておかねばならない。

府川源一郎の指摘は、今日の国語教育のあり方について、極めて多くの示唆に富む。その指摘された教育を実践する教材の一つに、山之口貘の詩が有効であることは、もはや言うまでもないだろう。

6、詩教材の可能性

山之口貘の詩や人柄については、詩人仲間や研究者たちが様々なことを述べている。貘の詩の多様性に負けないほどに興味深い。もちろん、それらの感慨を合わせると、詩と人間を愛した山之口貘の全体像がくっきりと浮かんでくる。その中から幾人かの言説を紹介しよう。

まず、佐藤春夫は、「山之口貘の詩稿に題す」として次のような詩を寄せている(注8)。

家はもたぬが正直で愛するに足る青年だ。／金にはならぬらしいが詩もつくっている。／／南方の孤島から来て／東京でうろついている。風見みたいに／／その男の詩は／枝に鳴る風見みたいに自然だ　しみじみと生活の季節を示し／単純で深みのあるものと思う。／／誰か女房になってやる奴はゐないか／誰か詩集を出してやる人はゐないか

佐藤のこの詩からは、貘の詩の特質と人柄が見える。詩の特質としては「自然である」こと、「生活の季節を示し」ていること、そして「単純で」あるが、「深みのある」表現であることなどが浮かび上がってくる。

金子光晴も、貘の詩才を高く評価した詩人の一人である。金子は遺稿詩集『鮪に鰯』の中で「貘さんのこと」として、次のように述べている。

貘さんは、よそでも書いたが、キリストとよく似ている。時々、間違われて迷惑したのではないかと思う。キリストは、貘さん同様びんぼうだっただろうが、びんぼうから超越して、びんぼうをあわれんで、かわいがっていたようなところがあったようだ。貘さんの場合も、まったく同じだ。びんぼうや死は、貘さんがいとしんで飼っている小動物のようなものであろう。いろいろ迷惑をかけられながらも、貘さんは、決してつよい声で叱ったりはしないので、そこで、びんぼうも少々のさばり加減だったのかもしれない。

貘の娘の山口泉は「沖縄県と父・など」として、次のように述べる(注9)。

時間は父にとって、無限に自分のものだったように見える。たった五十九年ぽっちの短い生涯ではあったけれど、実は、何百年、何千年、何万年という果てしない時間を、ちゃっかり私有していたのではないかと、私は密かに疑っているのである。そうでなければ、あの悠長な仕事ぶり、ひとつことに長いこと執着し続ける態度、などについて、いったいどんな説明がつくと言うのであろう。

詩人の山本太郎は、「バクさんの葬式一臨終で終わらぬ詩人山之口貘」題して、次のように述べる(注10)。

「バクさんの臨終の顔には髭がはえ、ソクラテスみたいだったという……」村野四郎さんの弔辞がきこえた。哲人の面影をもつ詩人はいまやすくない。バクさんはたしかに庶民の人間哲学をそのまま生きた不思議な詩人だった。（中略）。
バクさんのような詩を唄うためには、バクさんのような生き方が必要だった。だれにでもできることではない。六〇年近く破れ目をぬっては使い尽くしてきた底光りのする人生は、だれもがたやすく入手できるものではない。

評論家の藤島宇内は、「つき合い　一貘のいる風景／東京のはざまで」と題して次のように

述べる。(注11)。

私はあの戦争中、軍国主義の激流にほとんどの文筆家、マスコミが押し流され、戦争宣伝に加担せざるをえなかった時、それに押し流されない精神の自立性を保った文筆家もいたことを、戦後になって知った。貘さんはおよそ政治的な発想の人ではなかったが、軍国主義に迎合する気質は持ち合わせない点ではきわめてめずらしい文筆家の一人だったのである。

次に、今日活躍中の現代詩人荒川洋治の貘評も興味深い。山之口貘の詩には「地球」という語と「結婚」という語が頻繁に使われているとする。そして二つの語について、それぞれ次のように述べる。(注12)。

作者がいつも使う言葉、何かがあるとすぐに引き出して使いたくなる言葉のようだ。「地球」という一語を使うと、貘さんは元気が出てくるのである。いつもいつもではなかろうが、この一語が守神のように、作者について離れない。

「結婚」については、「山之口貘がもっとも執心した言葉だった」として、次のように述べる。

これはもう、たいへんな数である。そこらじゅうに出てくる。よく詩は、同じ言葉を使うな、と教えられるが、山之口貘の詩は、その意味では「人道に反する」ものだった。（中略）その実人生の暦をひもとくと「結婚」は山之口貘にとって一番の目標であったようで結婚さえできれば貧乏な生活からも抜け出すことができるし、精神的にも立ち直れると思ったらしい。（中略）ほんとうにこの詩人は、「結婚」の二字に引っ張られて生きた人であることが分かり、「結婚」という文字は「理想」や「幸福」という文字に置き換えられてくるのである。だが、山之口貘の詩においては、「理想」「幸福」ではない。あくまで、ずばり「結婚」なのである。そこがおもしろい。それは「地球」と同じだ。彼は自己の真実を描くために、語彙を敢えて拡大しなかったのである。（中略）。

彼は地球にせよ、結婚にせよ、そして詩にせよ、まるで物の世界を相手にするかのように向き合った。（中略）目に見え、手でつかめる物のように歌うのだ。物だから、いつでも簡単に呼び出すことができる。話題にし、文句を言うこともできる。そういう言葉との生きた関係をつくりあげた。その意味ではとても新しい詩人である。少なくとも人間を歌った詩人としてはとてもめずらしいことなのである。

荒川洋治の評では、貘は「自己の真実を描くために、語彙を敢えて拡大しなかった」という部分などは、特に興味深い。

このように、貘への評を見ていくと際限がない。いずれも評者の温かいまなざしが感じられる。貘、その人のなせる技だと思う。しかし、ここでは、詩人論を構築することが目的ではなく、詩教育の可能性を論ずることが目的なので、貘評の紹介は、これで終わりたいと思う。最後に山之口貘研究者の第一人者である仲程昌徳の言説を紹介する。仲程昌徳は、「生活のある風景、それが、山之口貘の詩なの」だ、と断じて次のように述べている。(注13)。

放浪、結婚、戦争、娘の成長、そして沖縄は、貘の詩作のひいた軌跡であるが、最後の沖縄は、彼のその「バランスを求めるこころ」を、ともすれば乱してしまいかねないほどに重いものであったようである。貘の沖縄に寄せるこころは、丁度、良きものが解体していくことにたいし、かなしみを寄せていく関係に似たものがあるが、貘のそれは、単なる郷愁といえるようなものではなかったと言えよう。（中略）。

彼にとって、生活を失ってしまうことは詩を失ってしまうことであったし、詩を失うことは生命を枯らしてしまうことと同然であったのである。

生活のある風景、それが、山之口貘の詩なのである。

このように、何人かの山之口貘評を見てきたがこれだけでも、貘の詩の有している世界が、今日という時代の困難さを照射する鏡となり、国語科教材として、多くの可能性を秘めていることが理解出来るはずだ。

山之口貘の詩が有している「伝統と文化」、「辺境と中央」、「方言と共通語」、「時代と生活」、「地域と世界」、「戦争と平和」などは、いずれも貘の詩のテーマのみに限定されるものではない。また、国語科の教科のみにも限定することのできない普遍的な広がりと深みを有したテーマである。そして、同時に今日的なテーマでもある。

書くことは、考えることだ。考えることは、よりよく生きることに繋がる。貘は、生きることが困難な時代に、よりよく生きることに苦悩し、心で繋がることを切望した詩人である。その手段として、ことばを選び、ことばで繋がろうとした詩人である。

貘の詩から、これらのことを発見することは、今日のグローバル社会における詩教材の可能性を問うことに繋がるものと思われる。そして、貘の詩は、この期待に十分に答えてくれるものと思われるのだ。

7、終わりに

この世に生を受けた一人の人間の軌跡には、様々な「物語」が織りなされる。山之口貘の軌跡にも、様々なエピソードがある。艱難辛苦の日々が織りなした物語もあれば、喜怒哀楽の織り糸もある。そんな様々な織り糸の一つに、「グジー事件」と呼ばれる愉快なエピソードがある。貘が県立一中に在学していたころのエピソードだ。(注14)。

貘は、友人の姉であるグジー（呉勢）に恋をした。初恋の相手だ。そのグジーと何とか婚約を成立させたいと思い、思案をした貘は、仮病を使って親を騙し、婚約を成立させたというのだ。その手法は、まず四六時中、布団に潜り、うなされているふうを装う。両親は心配をし、医者に診てもらうが、仮病であるがゆえに医者は首をかしげるだけで、治せるはずがない。そこで困った両親は、ユタ（巫女）を呼び、占ってもらう。貘は、ユタの前で、「グジー、グジー」と、うめいてみせて、見事にグジーとの婚約を成立させたというのである。しかし、破天荒な言動の多い貘に、やがてグジーは愛想をつかして、婚約を解消するというオチまでついている。なんともはや、微笑ましく愉快なエピソードである。

貘の詩の生まれる拠点の一つには、このような人間としての貘の個性や、生き方にもあるように思われる。そして、それが詩の魅力をも生みだしていく基盤になっているようにも思われる。

詩を読むことは、表現の手法を学ぶだけでなく、人間を理解することにも繋がるはずだ。それは語り手である作者を理解することであってもいい。作中に登場する人物を理解することであってもいい。また、詩の世界は真実であってもいいし、虚構であってもいいと思う。しかし、その世界で息づいている人間を理解することが、詩を読むことの大きな側面の一つであることに間違いはない。

貘の詩の魅力は、貘の作り出した詩世界で振る舞っている人間を理解することの喜びにもある。実は、ここにも貘の詩の有する新たな詩教材の可能性の一つが浮かび上がって来るようにも思われる。

このように見てくると、貘の詩は様々な切り口と、多様な可能性を秘めた詩教材の宝庫であると言っても過言ではない。

■資料：文科省検定国語教科書、及び沖縄県の国語科副読本に掲載された山之口貘の詩。

詩1　　船

文明諸君
地球ののっかる
船をひとつ
なんとか発明出来ないことはないだろうか
すったもんだのこの世の中から
地球をどこかへ
さらって行きたいじゃないか

詩2　天

草にねころんでいると
眼下には天が深い

風
雲
太陽
有名なもの達の住んでいる世界

天は青く深いのだ
みおろしていると
身体が落っこちそうになってこわいのだ
僕は草木の根のように
土の中へもぐりたくなってしまうのだ

詩３　ミミコの独立

とうちゃんの下駄なんか
はくんじゃないぞ
ぼくはその場を見て言ったが
とうちゃんのなんか
はかないよ
とうちゃんのかんこをかりてって
ミミコのかんこを
はくんだ　と言うのだ
こんな理屈をこねてみせながら
ミミコは小さなそのあんよで
まな板みたいな下駄をひきずって行った
土間では片隅の
かますの上に
赤い鼻緒の
赤いかんこが
かぽちゃと並んで
待っていた

詩４　弾を浴びた島

島の土を踏んだとたんに
ガンジューイとあいさつしたところ
はいおかげさまで元気ですかと言って
島の人は日本語で来たのだ
郷愁はいささか戸惑いしてしまって
ウチナーグチマディン　ムル
イクサニ　サッタルバスイと言うと
島の人は苦笑したのだが
沖縄語は上手ですねと来たのだ

詩５　鮪に鰯

人間みたいなことを
女房が言った
言われてみるとついぼくも人間めいて
鮪の刺身を夢みかけるのだが
死んでもよければ勝手に食えと
ぼくは腹立ちまぎれに言ったのだ
女房はぷいと横に向いてしまったのだが
亭主も女房も互いに鮪なのであって
地球の上はみんな鮪なのだ
鮪は原爆を憎み
水爆にはまた脅かされて
腹立ちまぎれに現代を生きているのだ
ある日ぼくは食膳をのぞいて
ビキニの灰をかぶっていると言った
女房は箸をさかさに持ちかえると
焦げた鰯の頭をこづいて
火鉢の灰だとつぶやいたのだ

詩６　会話

お国は？　と女が言った
さて　僕の国はどこなんだか　とにかく僕は煙草に火をつけるんだが　刺青と蛇皮線などの聯想を染めて図案のような風俗をしているあの僕の国か！
ずっとむこう

ずっとむこうとは？　と女が言った
それはずっとむこう　日本列島の南端の一寸手前なんだが　頭上に豚をのせる女がいるとか　素足で歩くとかいうような　憂鬱な方角を習慣してるあの僕の国か！
南方

南方とは？　と女が言った
南方は南方　濃藍の海に住んでいるあの常夏の地帯 竜舌蘭と梯梧と阿旦とパパイヤなどの植物が白い季節を被って寄り添うているんだが　あれは日本人ではないとか　日本語は通じるかなどと話し合いながら世間の既成概念達が寄留するあの僕の国か！
亜熱帯

アネッタイ！　と女は言った
亜熱帯なんだが　僕の女よ　眼の前に見える亜熱帯が

見えないのか！　この僕のように　日本語の通じる日本人が　即ち亜熱帯に生まれた僕らなんだと僕はおもうんだが　酋長だの土人だの唐手だの泡盛だのの同義語でも眺めるかのように　世間の偏見達が眺めるあの僕の国か！
赤道直下のあの近所

詩７　妹へ送る手紙
なんという妹なんだろう
兄さんはきっと成功なさると信じています　とか兄さんはいま東京のどこにいるのでしょう　とかひとづてによこした音信のなかに
妹の目をかんじながら
僕もまた　六、七年振りに手紙をかこうとはするのです
この兄さんは成功しようかどうしようか結婚でもしたいと思うのです
そんなことは書けないのです
東京にいて兄さんは犬のように物欲しげな顔をしています
そんなことも書かないのです
兄さんは住所不定なのです
とは　ますます書けないのです
如実的な一切を書けなくなって
といつめられているかのように身動きできなくなってしまい
満身の力をこめてやっとの思いで書いたのです
ミナゲンキカ
と　書いたのです

詩８　喪のある景色
うしろを振りむくと
親である
親のうしろがその親である
その親のそのまたうしろがまたその親の親であるというように
親の親の親ばっかりが
むかしの奥へとつづいている
まえを見ると
まえは子である
子のまえはその子である
その子のそのまたまえはそのまた子の子であるというように
子の子の子の子の子ばっかりが
空の彼方へ消えいるように
未来の涯へとつづいている
こんな景色のなかに
神のバトンが落ちている
血に染まった地球が落ちている

詩９　ねずみ
生死の生をほっぽり出して
ねずみが一匹浮彫みたいに
往来のまんなかにもりあがっていた
まもなくねずみはひらたくなった
いろんな
車輪が
すべって来ては
あいろんみたいにねずみをのした
ねずみはだんだんひらたくなった
ひらたくなるにしたがって
ねずみは
ねずみ一匹の
ねずみでもなければ一匹でもなくなって
その死の影すら消え果てた
ある日往来に来て見ると
ひらたい物が一枚
陽にたたかれて反っていた

【注記】

注１　略年譜の作成に当たっては、『貘のいる風景－山之口貘賞20周年記念誌』（1997年琉球新報社）、及び『山之口貘詩文集』（1996年講談社）を参考にしてまとめた。

注２　山之口貘「自伝」（『山之口貘詩文集』1996年講談社収載）。

注３　足立悦男「異化の詩教育学ーその構想と展開」（『論叢国語教育学　復刊第１号　通巻６号』2010年広島大学国語文化教育学講座収載）。

注４　同上。

注５　高良留美子「生き物への共感－山之口貘と沖縄」（『中国』５月号、特集沖縄1970年）

注６　仲程昌徳「『ない』ことをめぐる『思辨』」（『貘のいる風景－山之口貘賞20周年記念誌』1997年琉球新報社収載）。

注７　同上。

注８、９、10、11　『貘のいる風景－山之口貘賞20

周年記念誌』1997年琉球新報社収載。

注12　荒川洋治「詩人と『物』」（『山之口貘詩文集』1996年講談社、巻末解説）。

注13　仲程昌徳『山之口貘　詩とその軌跡』1975年、法政大学出版局。

注14　山之口貘「私の青年時代」（『山之口貘詩文集』（1996年講談社収載）、および松下博文「喜屋武呉勢と石川妙子」（『貘のいる風景－山之口貘賞20周年記念誌』1997年琉球新報社）参照。

【参考文献】

○金子光晴編『山之口貘詩集』1968年、彌生書房。

○『貘のいる風景－山之口貘賞20周年記念誌』1997年、琉球新報社。

○仲程昌徳『山之口貘　詩とその軌跡』1975年、法政大学出版局。